生誕100年　八木義徳の世界③

血と土とそして海の風から

血脈と向き合って(3)

――失い、そして得た作家への道――

早稲田大学在学中は、雑誌「早稲田文学」に作品を発表し、「作家たるべき才能は忍耐である」と教えを受けた恩師の芳江喬松教授と出会う。卒業前年の作「海豹（アザラシ）」では、生涯の師と仰ぐ横光利一に初めて褒められ作家への希望が沸いた。その年、父、田中好治が、八木との溝を埋めることなく享年56歳で他界。

27歳の春、大学を卒業した八木は、就職先の新会社設立に伴い満州に派遣され、妻りよと共に新生活を始める。働きながら年に1つ2つの作品を発表する中、恩師の芳江教授と弟義豊の訃報が相次いで届く。満州に渡って3年後の昭和16年、太平洋戦争が開戦。慣れない生活から精神的に健康を害した妻は、八木の日本への出張を機に帰国したが、この頃夫婦仲は修復不可能と思われるほど悪化していた。翌年、八木も退職して日本へ戻り、長男史人の誕生をきっかけに幼い頃から縁の薄かった円満な家庭生活を築こうと旅行会社に入社する。

しかし、3人の暮らしは長くは続かなかった。次の年、八木は満州で出会った実在の中国人労働者をモデルに、遺書のつもりで書いた作品「劉廣福（リュウカンフウ）」を残して入隊し、中国に行軍する。この作品は、第十九回芥川賞を受賞するが、戦時下の折、中国で軍務に就く八木の元に、その知らせが届いたのは数カ月後の事だった。

「このおなじ　月の光や　くに遠く」

満月の夜、知らせを受け、喜びをかみしめて、故郷の師を思い詠んだ一句である。

昭和20年に終戦。中国での約9カ月に渡る抑留生活を経て、日本に復員した八木を待っていたのは、前年の東京大空襲で妻と長男が亡くなったという悲報だった。妻との和解、長男との再会を待ち望んでいたが、それはかなわぬものとなり、母セイが同居していた兄夫婦の家に身を寄せ、やがて勤めていた旅行会社も退社する。

八木の人生には、芥川賞受賞という喜びと家族を失う悲劇が表裏一体となって訪れた。この深い悲しみを「帰来数日」「母子鎮魂」などの作品にぶつけたが、家族を失った喪失感と、その命と引き換えに得た自由によって作家一筋に生きる道のはざまでの葛藤は強く、生活は混迷を極める。だが、その道を突き進みながら八木が見出した人生の命題は、文学という芸術に鬼となって立ち向かい生きることであった。

（協力・港の文学館）

地域の力

舟見町中部町会
たすけ愛ふなみ

お茶と茶菓子をつまみながら、世間話に花が咲く

「たすけ合い」より「たすけ愛」

舟見町会館で地域の人が自由に集まり、お茶や食事を楽しみながら世間話に花を咲かせている。

同町会が4月に開設した「お休み処（どころ）ふなみ」は、「住み慣れた者同士、気軽に集まって交流できる場所を作りたい」と町会の婦人部、福祉委員、民生委員が協力し合い「たすけ愛ふなみ」を結成して運営を始めた。

毎月2回、10時から15時まで開き、出入りは自由。午前中に寄って、買い物や病院に行き、帰りにまた寄っていく人もいる。

第2火曜日は100円でお茶や茶菓子を、第4火曜日は250円で軽食を提供する。気軽に来てもらえるようにと、料金を安く設定し、その中でやりくりしている。4月の献立はカレーライス。約30人が訪れ、手作りの昼食を楽しんだ。

「こうした取り組みをずっとやりたいと思っていたけれど、なかなか言い出しにくかった」と民生委員の佐藤さん。でも、声を掛けたら、みんなが「いいね、やってみようよ」と賛同してくれ、驚くほど話が進み、あっという間に年間のメニューまで決まってしまったという。

婦人部長の浅野さんも「来た人が『楽しかった、また来るね』と笑顔で帰っていく姿を見ると、やって良かったと思います」とうれしそうに話す。

「たすけ合い」より「たすけ愛」。集まった人々は、そんな「愛」にすっぽりと包まれている。

人のうごき

（平成23年4月末）

人口　94,381（＋165）

世帯　48,047（＋257）

（　）は前月比

市・道民税1期
国民健康保険料・
後期高齢者医療保険料1期
介護保険料1期
6月30日までに納めましょう

編集後記

▶震災を受けた妻の実家を見舞いに宮城へ。生きているのが奇跡なくらいの生死ギリギリな話を多く聞いた。今月号掲載の災害時要援護者避難支援はそのギリギリを地域の力で「生」に導く力が絶対ある。(え)

▶私が子どもの頃（約30年前）、隣近所とは親戚のような付き合いで町内の人もほとんどが顔見知りでした。「お休み処ふなみ」の開設によって、またあの頃のようになればいいなぁと思います。(こな)

▶今月は「お知らせステーション」を担当。原稿から記事を作る際、行数調整用のイラストをいくつか入れておきます。同じように私の愛妻弁当にはおかず調整用の枝豆とミニトマトがたまに入ります…。(お)

▶共働きの我が家も子育てに祖父母の手を借りたが、昔ながらの子育ても成長した今は良い思い出。近頃は、通学時に声掛けや立ち話もしてくれる近隣の方々と、親よりも子どもの方が親しい。(ゴ)

▶市民活動センター5周年。開設までの苦労と多くの笑顔に囲まれたオープン光景を思い出し、特集記事に思わずジーン。活センが「市民のお茶の間」になることが、開設を担当した私の一番の願い。(き)

広報むろらん

2011年6月1日 No.963

■今月の表紙

5月の日差しを受け、桜が咲き始めた母恋富士下桜並木。暖かな陽気の中、みどり保育園の園児たちが見事なお花のトンネルを散歩中のワンショット。色を伝えられないのが残念なくらい、きれいな桜色でした。

■発行・編集

北海道室蘭市市民対話課

〒051-8511 室蘭市幸町1-2

☎ 0143-25-2193

FAX 0143-25-2835

HP http://www.city.muroran.lg.jp/

■印刷

日光・福山印刷特別共同企業体